

エゴイストは秘書に恋をする。

Hayumi & Fumitaka

市尾彩佳

Saika Ichio

Eternity



エタニティ文庫

目次

エゴイストは秘書に恋をする。

5

書き下ろし番外編 木漏れ日の中で

335

エゴイストは秘書に恋をする。

1 物語が向かう先とその始まり

「ん、ふっ……」

唇と唇との間から、情欲に濡れた吐息が漏れ出る。

室内灯に煌々と照らされたオフィスの一室で、羽優美は深い口づけに溺れていた。

男は自らの身体で彼女を押しさえつけてブラウスのボタンを外し、その手を中に差し込んでくる。ブラとキャミソール越しに胸を揉みしだかれた羽優美は、首を振ってキスから逃れ、か細い拒絶の声を上げた。

「い……や」

「嫌……どうして？」

酷薄な笑みを浮かべた彼は、低く艶っぽい声で羽優美の耳元に囁く。そしてブラウスから手を引き抜き、羽優美の滑らかなセミロングの髪をかき上げ、耳の裏側を舐め上げた。熱く、ねっとりとしたその感触に、羽優美はぞくつと身を竦ませる。

彼女の反応に、彼は満足げな声を漏らした。

「君だってその気になってるくせに」

彼の言う通りだ。キスをされ、ほんの少し愛撫されただけだというのに、羽優美の身体には既に火が点き、その先の快楽を求めて疼き始めている。

でも、羽優美にだって譲れないことはある。

羽優美は力の入らない手で彼の身体を押しながら言った。

「会社では……嫌です」

定時を過ぎ、日はとつくに暮れ、廊下には人の気配など一切ない。が、だからといって会社は淫らな行いをしていい場所ではない。

それにこの部屋は、羽優美の働く場所だ。大きなデスクが二つと、壁の一面を埋めるキャビネットの他は何一つない、無機質で味気ない部屋。それでも、ここで働くことへの誇りだけが、この愛撫に溺れそうな羽優美を支えていた。

この場所を汚したくない。

絶るような思いで訴えたのに、羽優美の首筋に顔を埋めていた彼は冷たく言葉を返す。

「何を今更——ここでするのは初めてじゃあるまいし」

彼の言う通りだ。けれど、ここでは二度としたくない。

「でも常務……会社でこんなことをするなんて嫌です……」

羽優美が懇願の声を絞り出すと、彼は小さくため息をついて顔を上げた。

優雅な弧を描きながらも強さを感じさせるきりりとした眉。切れ長の目。まっすぐな鼻梁。薄い唇。頬から顎にかけては、男らしいすっきりとした輪郭が描かれている。昼間は整髪剤できっちり整えられている艶やかな黒髪は、今は乱れて一筋二筋、目元に掛かっていた。普段はストイックな感じのする彼だけど、髪が乱れただけで、美しい顔立ちに野性味が加わる。その上、獲物を狙う肉食獣のような目で見つめられて、羽優美は胸の高鳴りを抑えることができない。

一瞬ほうっと見上げてしまった羽優美に、彼は侮蔑の笑みを向けた。

「君にそんな節度があったなんて、驚きだよ」

彼から突きつけられた言葉が、羽優美の心を抉る。

泣きたい。でも泣いちゃ駄目。

私には、そんな資格はない——

泣くのをこらえていると、彼は大きなため息をついて羽優美から離れた。

「ここが嫌なら、場所を変えよう」

彼はこちらを見もしないで、廊下に続くドアへ向かう。

羽優美は壁に身体を預けたまま、その後ろ姿をほんやりと見つめた。

ドアを開けると、彼は振り返る。

「どうした？ 来ないのか？」

「来ないなら、それでもいい」と言われているようだ。

羽優美は、バッグとコートを手にして彼のほうへ歩いていった。

たつぷりと愛撫された羽優美の裸身が、ぐずぐずに蕩けてモノトーンのベッドに沈む。

彼は、まだ荒い息をついている羽優美の両脚を抱え、愛液でたつぷりと濡れた羽優美の秘所に、避妊具を着けた自身を擦りつけた。

「欲しいって言えよ」

挑発するようなその声に、羽優美はわずかに正気に引き戻される。

羞恥のあまり、返事を躊躇っていると、彼は自身の切っ先で羽優美の膨れ上がった快樂の芽を觸り、入り口にくいっと押しつける。その弾みでくちゅり、と音を立てて新たな蜜が溢れ出した。指や舌での繊細な愛撫とは違う、荒々しくもどかしい刺激。羽優美の心臓は、期待に疼いて早鐘を打つ。

しばしの葛藤の後、羽優美は抗い切れずに口を開く。

「欲しい、です」

彼はニヤッと不敵な笑みを浮かべると、自身を一気に羽優美の中へ突き入れた。

「ひあ……っ！」

達する寸前で放置されていた身体は、彼を迎え入れた瞬間に弾け飛ぶ。軽い絶頂に羽

優美は脚を突つ張らせ、びくびくと身体を震わせた。

「あつ、やあ！ ま、待ってっ、おねが——ああっ！」

続けざまに何度も突き上げられる。淫らな粘着音が寝室に響き渡る中で、羽優美は喘ぎながら懇願した。

だが、その途端、敏感になつてる最奥に彼の硬い先端をぐりつと押しつけられ、羽優美はたまらず嬌声を上げる。

そんな羽優美を暗い愉悦のこもった瞳で見つめながら、彼は荒々しい呼吸とともに嘲りの言葉を吐いた。

「待ってっ？ よく言うよっ、腰揺らしてっもっどっって欲しがってるくせに……っ」
「いやっ、言わないでください……っ」

そんなこと、言われなくても分かつてる。絶頂を迎えた身体を攻め立てられて苦しいのに、腰が勝手に動いてさらに快楽を貪ろうとしている。

それがたまらなく恥ずかしい。恥ずかし過ぎてどうにかなつてしまひそうだ。

なのに自分では止められない。その動きも、中の襷の収縮も——

羞恥に染まっているだろう顔を両手で隠して身悶えると、彼はからかうような声を浴びせてくる。

「こんなに淫らになつておいてっ、清纯ぶるなんて今さらだろ……っ」

彼は羽優美にのし掛かりながら、羽優美の両手を掴み、頭の上に押さえつけた。すると、羽優美の中に入り込んでいた彼の角度が変わる。それまでとは違う快楽のポイントを突き上げられ、羽優美は仰け反り甲高い声を上げた。

「ああっ！ やっ、んんっ」

「清纯そうなふりして男を誘惑して、ここにどれだけ男を啜え込んできたんだ？」

「そ——んなことっ、してな——んあ——」

奥の感じるところを硬い切っ先で抉られて、羽優美は否定の言葉もろくに紡げず、あられもない声を上げる。目の前が白く明滅し、二人が繋がりが合った場所から響く水音はさらに激しくなる。

不意に、突き放されるように羽優美の身体は解放された。彼の熱く滾ったままの昂りがずると抜けていく。羽優美は肉壁を大きく擦るその刺激に身体をぞくぞくと震わせながら、それまで下ろすこともままならなかった両脚を、力なくベッドに落とした。

絶え間なく与え続けられた刺激から解放され、羽優美は懸命に息を吸って失いかけていた酸素を取り戻す。しかし、これはつかの間の休息でしかないと彼女は知っている。

羽優美の呼吸が整わないうちに、彼は彼女の身体を俯せにした。そして腰だけを引き上げると、羽優美の両脚の間に自身の身体を割り込ませる。そして恥じらう羽優美に身じろぎする間も与えず、後ろから勢いよく自身を沈めてきた。

「ひう……っ」

仰向けの時にはなかった苦しさに、悲鳴のような嬌声きよせいでが漏れる。その苦しさも、二度三度と突き込まれるうちに、多少のキツさを伴った強い快樂へと変わっていった。二人が激しくぶつかり合うことで羽優美の中から溢れた愛液が飛び散り、内股を濡らしていく。

「んっ、あんっ、ふっ……はあ……」

顔が半分ベッドに沈んで、さつきよりも息がしづらい。何とか上体を起こそうと腕に力を込めると、背後で「くっ」という呻き声うめが上がった。理由は分かっている。羽優美の今の動きで膣ちゅうに力が入ってしまった、彼自身を締め上げたからだ。

彼の昂りの形をはつきりと感じてしまい、羽優美も息を呑む。すぐに大胆なことをしてしまつたのだと気付いき、羞恥しゅうちに頬を染めた。

「男を悦ばせるのが上手いな」

「言わな……っ、あっ……んやっ、あっ……あふっ……」

彼が笑うとその振動が体内に伝わって、抗議の言葉は喘ぎ声あえに変わる。

自分が無意識にどんな淫らな反応をしようか不安で、身動きが取れない。じつと快感に耐えていると、彼はそのまま羽優美の上半身を抱き起こし、あぐらをかいた自身の腿の上に座らせた。

「やあ！ ヤメてっ、深い……っ！」

痛くはないけれど、彼自身が際限なく入り込んでくるような錯覚に、恐怖を覚える。

羽優美は怯えて彼から逃れようと身を振った。けれど、彼の腿は羽優美の両膝を大きく割り、胸に回された逞しい腕は羽優美の身体を逃がそうとはしない。羽優美は怖がるあまり、彼の腕に指を立てて縋り、少しでも身体を浮かそうとつま先でシートを必死に掻いた。その動きが、彼をより刺激しているとは気づきもせず。

半ばパニックに陥っている羽優美のうなじに顔を埋め、彼は吐息交じりに囁いた。

「大丈夫だ。怖がらなくていい」

嫌がっているのではなく怖がっていると理解してくれた——その言葉と優しい声音に、羽優美は安堵を覚えてふっと身体から力を抜く。そのタイミングに合わせ、彼は下から大きく羽優美を突き上げた。

「あんっ、あ……はあ、んんっ……」

あんなに怖かったのが嘘のようだった。羽優美の身体は奥深くまで突き進んでくる彼を味わい、頭まで貫く強い快樂に痺れる。彼はうなじに吸いつき、両胸を揉みしだいていた指で敏感な蕾つぼみをきつく摘まむ。立て続けに与えられる刺激に、羽優美はたちまち我を忘れた。

「ああっ！ はあ、あっ……あっ、ああんっ」

体内で新たな愛液が次々と生まれ、彼の律動によつてかき出されていく。二人の繋がりを滑らかにするそれは、もはや彼の太腿全体を濡らし、シーツにまで染み込んでいた部屋に響きわたるいやらしい水音は、今の羽優美には別の世界で奏でられる音色にしか聞こえない。

誰かに結合部を見せつけるような淫らな体勢は、羽優美を急速に絶頂へと追い立てる。「常……常、務っ、も、もう……！」

頂点に向けて速度を上げる彼が、余裕のない声を上げた。

「いい加減、名前を呼べよっ」

「文——あ、ああ、ああああ——！」

彼の名を呼びかけた羽優美の声は、歓喜の叫びにすり替わった。

部屋を暖めるエアコンが静かにうなる寝室に、二人が忙しく息を継ぐ音が響く。

ともに果てた後、羽優美と彼は重なり合ったまま俯せに倒れ込んだ。

彼の熱く汗ばんだ身体が、羽優美の小柄な身体を押しつぶす。息は苦しかったけれど、羽優美は幸せだった。これ以上ない親密な触れ合い。本来であれば彼とこんな風になるはずじゃなかった。だからこそ、どうしても失いたくないと思ってしまう。

けれど息を落ちつかせた彼は、未練などないとはかりにすぐに羽優美から離れた。ベッドを下り、無造作な手つきで羽優美に上掛けをかけて、寝室から出ていってしまう。かけられる言葉は一つもない。愛の言葉はもちろんのこと、未だ激しい呼吸を繰り返す羽優美への労りの言葉さえも。やがて細く開いたドアの向こうから、シャワーの音が聞こえてくる。

分かり切ったことじゃない……

羽優美は仰向けになって、涙が溢れそうになる目元に腕を押し当ててる。

彼とは結婚してゐるわけでも、恋人同士でもない。友好的にセックスを楽しむセフレの関係ですらない。彼は羽優美を軽蔑して、関係を迫るけれど、羽優美はそれを拒むことも、その軽蔑が誤解からくるものだ、と打ち明けることもできない。

だって、私は——

言葉にできない想いに胸を詰まらせていると、シャワーの水音が止まった。少しすると、スウェットパンツを穿いた彼が、タオルで頭を拭きながら寝室に戻ってくる。

「シャワーを浴びてこい」

ついさっきまで情熱的に抱き合っていたとは思えない、冷やかな声。腕をずらして声のほうを見れば、彼は整髪剤を洗い流した前髪の奥から、辛辣な瞳で羽優美を睨みつけてくる。

「……はい」

羽優美は素直に返事をして、上掛けで胸を隠しながらのろろと身体を起こした。

* * *

事の始まりは、一ヶ月半前にさかのぼる――

十月上旬のある月曜日、始業直後のこと。

「えっ？ 異動、ですか？」

高梨羽優美は、戸惑って目の前の営業課長に訊き返した。課長は、困ったような笑みを浮かべて答える。

「急なことだからわたしも驚いたんだが。ほら、親会社の社長令嬢の仁瓶綾奈さん、彼女が今日退職することになって、急いで後任が欲しいと言われたんだ。三上常務の専属秘書だよ。突然のことではびっくりしたと思うが、行ってくれるね？」

上司に言われれば行くしかないけれど、羽優美は戸惑いを通り越して混乱していた。

私が秘書……？

寝耳に水とはこのことだ。羽優美は営業アシスタント。秘書課とは何の関わりもない。秘書課には優秀な人材がたくさんいるだろうに、何でその人たちでなく羽優美に専属秘

書の話が来たのだろうか？

口元に手を当てて考え込みかけた羽優美に、課長ははっきりとした口調で言う。

「今すぐ来てほしいそうさ。私物を持って秘書課へ行くように」

「え……？」

驚いて顔を上げると、課長はさらに急かしてくる。

「特に必要な引き継ぎはないだろう？」

「は、はい……」

課長が言うように、引き継ぎは必要ない。営業アシスタントは、誰が何を頼まれてもこなせるよう、日頃から業務連絡を徹底しているからだ。

営業課のみんなへの挨拶もそこそこに、羽優美はデスクの下に置いていたバッグを持って、秘書課のある最上階へと向かった。

営業アシスタントの羽優美は、重役たちとは接点がない。そのため、最上階である七階を訪れるのは初めてだ。

右も左も分からないまま、それぞれの部屋に付けられたプレートの中に『秘書課』の文字を見つけると、唾を呑み込んで、ぐっと覚悟を決める。それから思い切ってドアをノックした。中から「どうぞ」という声だったので、おそるおそるドアを開ける。

秘書課は二十畳くらいの広々としたスペースで、中には同じ方向を向いたデスクが整然と並べられていた。そこで働く女性たちは仕事に集中しているのか、ある人はまるで羽優美に気付いていないかのようにはファイルを抱えてきびきびと歩き、またある人は一心不乱にパソコンのキーボードを叩いている。

どうしたらいいんだろう……

営業課長から秘書課に行くよう言われたからには、ここで次の指示を仰ぐしかないのだけれど、誰に訊いたらいいのかわからない。それでもそっと一歩足を踏み入れてみると、女性の苛立った声（いじだ）が飛んできた。

「あなた誰？ 何の用？」

声のほうを見ると、一つだけ他のデスクと対面する形で置かれたデスクがある。そこに、カールしたブラウンの髪をサイドでエレガントにまとめた女性が座っていた。目元がきりつとした美人で、黒のカットソーに、上品なグレージュのジャケットを着ている。その女性は傍らに立っていた女性との話を中断して、羽優美を睨むように見つめてきた。

怖かったけれど、質問できそうな相手が見つかり羽優美はほっとする。

「え、営業課から来た高梨羽優美です。秘書課に行くように言われて来たんですが……」

「聞いてないわ。誰にそんなこと言われたの？」

叱責にも似た口調で言われ、羽優美は萎縮（いじく）してしまう。

「か、課長から言われたんです。今日から私、専属秘書になるとのことで内辞をいただいたんですが、詳しいことは秘書課で訊くようにと……」

そういうことだよな？ と心の中でつぶやいたその時、女性がバン！ とデスクを両手で叩いて立ち上がった。

「専属秘書にですって？ 誰の？」

怒りのこもった低い声にびくびくしながら、羽優美は記憶を辿る。

「ええっと、確か三上常務だったと」

思います——と最後まで言わせてもらえなかった。

「何で秘書課に所属したこともないあなたに三上常務の専属秘書の話が行くの？ おかしいじゃない。そんなたわごとを言うために来ないでちょうだい。仕事の邪魔よ。出ていって！」

「え……でも……」

羽優美は仕事をするために来たのだから、さすがと引き下がることはできない。返す言葉を探して立ちつくしていたけれど、目を吊り上げた女性がつかつかと近寄ってきて、羽優美を乱暴に秘書課の外へと押しやる。

ボタン！ と目の前で勢いよく扉を閉められてしまい、羽優美は途方に暮れた。

今の様子からして、彼女は本当に何も聞いていないのだろう。もう一度ノックして入っていったところで、また追い出されるだけだ。

羽優美はしばし悩んだ末に、営業課に戻ることにした。

「すまん、聞き間違いだった。三上常務のオフィスに来てくれ、だそっだ。『三上文隆』のプレートがかかっている常務室のドアを開けると、すぐ秘書室になっていて、その奥に常務のオフィスがある。」

改めて問い合わせさせてくれた営業課長にそう謝られ、羽優美は再び最上階を訪れていた。えんじ色の高価そうな絨毯が敷かれた廊下をおそろおそろの進み、目的のプレートのかったドアをノックする。だが、待っていても返事がない。そこで羽優美はそつとドアを開けてみた。

そこは縦長の、八畳くらいはありそうな部屋だった。左側にデスクが二つあり、その後ろの壁にはキャビネットが隙間なく並んでいる。正面は一面窓になっていて、右手の壁にはドアが一つあった。他にドアは見当たらないので、奥と^{ウツ}いうのはあのドアの向こうのことだろう。

前任の秘書である仁瓶綾奈の姿はない。羽優美は小さく「失礼します」と言って秘書室に入ると、続いて奥のドアをノックした。

今度はすぐに返事があった。

「誰？」

男性の声だ。響きのいい声音で、多分若い人。

「あ、あのつ、え、営業課から来ました高梨羽優美ですっ」

どもりながら返事をする、一拍置いてから声が返ってきた。

「入ってきて」

そつけない返事。拒絶されているような冷たささえある。

「し、失礼します……」

先刻の秘書課でのことを思い出してしまい、羽優美はこわごととドアを開けた。

こちらの部屋は、いかにも重役室といった重厚な内装だった。木目のくつきりとした壁に風景画が飾られ、応接セットも営業課にあるものより一回りも二回りも大きい。

部屋の中にいたのは、男性が一人だけだった。中に入ってドアを閉めた羽優美は、窓辺のデスクに着いてパソコンを操作する男性に改めて目を向けた。その視線に気付いてか、男性がふと顔を上げる。

その瞬間、羽優美は時の流れを忘れた。

社内報に載っていたので、顔は以前から知っている。けれど羽優美は今、一瞬で目を奪われた。

年の頃は三十代半ば。整髪剤で整えられた艶やかな黒髪。優雅な弧を描きながらも強さを感じさせる眉。切れ長の目。まっすぐな鼻梁。薄い唇。頬から顎にかけては、男らしいすっきりとした輪郭が描かれている。

社内報の顔写真の人には違いはないけれど、その数倍も美しい男性がそこにいた。

こんなにかっこいい人が存在するなんて、信じられない……

テレビや映画などで俳優やアーティストを見て、かっこいいと思ったことはあっても、今みたいに衝撃を受けたことはなかった。

ぼうっと見つめていると、男性は眉をひそめて冷やかな声をかけてきた。

「高梨さん？」

「はっはい！」

我に返った羽優美は、慌てるあまりどもってしまふ。男性は厳しい表情をして席を立った。

「常務取締役、三上文隆だ。君にはこれから僕の専属秘書を務めてもらう」

その声からは親しみのかけらも感じられず、羽優美はまたもや萎縮してしまふ。

「よ、よろしくお願いします」

羽優美は詰まりながらも挨拶し、遠慮がちに頭を下げる。

顔を上げた時には、三上常務は席に着いて再びパソコンに向かっていた。

えつと……私はどうすればいいの？

数秒待ってみたが、彼は仕事に没頭していて羽優美のことなどすっかり忘れているように見える。

羽優美は思い切って訊ねた。

「お忙しいところすみません。仁瓶綾奈さんはどちらにいらっしゃるのでしょうか？」

彼は顔を上げて、不審げな目を羽優美に向けてきた。

「……仁瓶さんに何の用？」

何でこんな警戒した言い方をするのか分からない。前任者に会いたいと思うのは、おかしいことだろうか？

羽優美は困惑しながらおぼろげと言った。

「仕事の引き継ぎが……それに、秘書ってどんな仕事をするのか分からないんです……」

——教えてくれなかったということは、知っていて当然だと思われていたのかもしれない。

そのことに気付いた羽優美は慌てて謝った。

「秘書はお仕事をサポートするのが仕事なのに、お手を煩わせてすみません！ 基本的なことを教えていただければ、後は自分で何とかしますから！」

羽優美の言葉を聞き終えると、何を思ったのか三上は気まずげに表情を歪めて目を逸

らした。

「……基本的には営業アシスタントと同じだ。電話応対と資料の管理。分からないことは必ず訊いて。自己判断はミスにつながるから」

言われて羽優美は、営業アシスタントをしていた時も自己判断禁止が徹底されていたことを思い出す。

仕事のことをまるで知らないのに、自分で何とかするなんてミスの元だ。自分のさらなる失言に気が動転してしまう。

「すっ、すみません！ そうさせていただきますー！」

「またもや勢いよく頭を下げる羽優美に、三上は突き放すように言った。

「隣の部屋は好きに使ってくれていいから、まず確認を。——行って」

「は、はい」

三上の声に追い立てられるようにして、羽優美は隣の部屋に向かう。

ドアを静かに閉めた羽優美は、ほうっと息を吐いた。

「なんだか、気難しそうな人だな……」

けれど分からないことは訊いていいと言ってくれたし、気まずくても何とかやっていたはずだ。

かかってくる電話の応対をしながら、デスクの引き出しやキャビネットを開けて中を覗く。

キャビネットの中はほとんど空で、残っている資料も古いものばかりだった。デスクの引き出しは筆記用具がやたらと多く、他には変に折れた書類、仁瓶の私物と思われる化粧品や小物がばらばらと入っているだけだ。

「なんだか、仕事をしてた人のデスクとは思えない……」

仁瓶の私物は後で段ボール箱をもらってきて詰めることにして、まずはくしゃくしゃな書類を全部出して広げた。大事な書類があるかもしれないから、三上に指示を仰がなければならぬ。書類を全て広げ終えたと、羽優美は困ってしまった。

「管理する資料って、これのこと……じゃないよね？」

これだけでは資料と言うにはおそまつだが、他に資料らしきものは見当たらない。そのためさつき顔を出したばかりで申し訳なかったけれど、羽優美は思い切って三上のオフィスのドアをノックする。

「返事があったのでおそるおそる中に入ると、三上に鋭い視線を向けられた。

「何か分からないことでも？」

「何だか怒られているみたいで怖い。でも、羽優美は勇気を出して話し始めた。

「お忙しいところ、申し訳ありません。秘書室の確認を終えました」

「もう？」

確認が速すぎて、ちゃんと仕事してないと思われたのだろうか。羽優美は懸命に続ける。「あの……秘書室にはほとんど物がなかったんです。資料は古いものがほんの少ししかなかったですし、その他はたくさんさんの筆記用具と仁瓶さんの私物だと思われる物があつただけで……。よろしければ、次にすべき仕事のご指示をいただけたいでしょうか？あと、キャビネットがうつつすら汚れているので、掃除道具を借りてきて掃除もしたいです」緊張しながらまくし立てていた羽優美は、三上がぼかんとしているのに気付いて言葉切る。一度に言うのはマズかっただろうか。でも、何度も訊きに来るよりは仕事の邪魔にならないと思っただけだ。

「あの……一度にたくさんお訊きしてすみません」

羽優美の謝罪を聞いて我に返ったような顔をした三上は、視線を逸らして後ろ頭を掻いた。そして気を取り直したように立ち上がる。

「いや、こちらこそすまなかつた。管理してほしい資料はこのキャビネットにある。多忙なため未整理になっているので、それを全部整理して、秘書室に保管してもらいたい。ただし五年より前の資料は別にしておいて。秘書室にあつた分もだ。処分するか保存するかは、後で僕が判断する。量が多いから、一日にできると思う分を毎朝持つていつて。仁瓶さんの私物はまとめておいてもらえれば後で僕が持つていこう。短時間席を外

す分には、いちいち僕の許可はいらない。掃除もそうだ。君の判断でしてくれていい」

そう説明する三上からは、先ほどの怒りは消えていた。そのことにほっとしつつ、羽優美は「分かりました。ご指示ありがとうございます」と言っただけで頭を下げた。

三上のオフィスから資料を運んだり、キャビネットを掃除したりしているうちに、時間はいつの間にか正午を回っていた。

オフィスから出てきた三上は、「これからは、正午になったら一時間の昼休憩を取るように」と告げる。

羽優美はオフィスに引き返そうとした三上に「それでは今から昼休憩に行ってきます」と申し出て、お弁当箱の入った巾着きんちやくを持って秘書室を出た。

三階にある社員食堂は、広々とした明るい室内に、丸テーブルや大きな柱に沿ったカウンター席が設置されたおしゃれな空間だ。メニューも、サラダやスープ、肉や魚のメイン料理が少しずつ載ったワンプレートランチなどおしゃれなものもあって、利用する人は多い。

食堂に入った羽優美が中を見渡していると、丸テーブルの一つに座っていた友人の岸川圭子かきづこが、手を上げて手招きしてきた。羽優美も小さく手を上げて、まっすぐその席に向かう。

圭子はショートボブの似合う快活な女性で、営業アシスタント同士という以上に羽優美と仲が良かった。今朝方、羽優美が不安そうに秘書課に向かおうとしていた時も、いつものように一緒にご飯を食べようと言ってくれたのだ。

羽優美はお弁当をテーブルに置きながら、日替わりランチを前にした圭子に声をかける。

「ごめん。遅くなって」

「大丈夫、大丈夫。今から食堂に来るってメールくれたから、自分のランチ買って待ってたよ。はい、これ羽優美の分のお茶」

圭子は自分のトレイに載せていたコップを一つ、羽優美のお弁当の隣に置く。

この社員食堂では持参したお弁当を食べていいし、ここのメニューを頼まなくてもセルフサービスのお茶を無料で飲むことができる。

「ありがとう」

羽優美はお礼を言うと、すぐに席に座ってお弁当を広げた。

「で、新しい仕事はどう？」

箸を取りながら早速訊いてきた圭子に、羽優美は曖昧な笑みを浮かべた。

「秘書の仕事なんて私に務まるのかなって心配だったけど、営業アシスタントとほとんど変わらないみたいだからホッとしてるとこ」

「それで、三上常務はどう？ 間近で見た感想は？」

「え……」

思ってもなかったことを訊かれ、羽優美の頬は赤らむ。

そんな羽優美を見て、圭子はやにや笑う。

「その顔！ まさか一目惚れ？」

「ううん！ そういうんじゃないから！」

慌てて否定したけど、圭子は納得してくれない。

「ウソウソ。顔真っ赤だよ？」

圭子が羽優美をからかうと、思わぬ方向から厳しい声が飛んできた。

「あなた方、うるさいわよ！」

「すみません！」

圭子と二人して謝りながら声のしたほうを見ると、先ほど秘書課で見た三人の女性がこちらに近付いてくるところだった。先頭に立つのは、羽優美を秘書課から追い出した女性だ。いかにも憎々しげに羽優美を睨んでくる。

「特にあなた。三上常務の秘書になったからには、それにふさわしい品位を身につけてもらわなくては困るわ」

「す、すみません……」

肩をすぼめてもう一度謝ると、女性はつんとそっぽを向き、他の二人を引き連れて離れていった。それを見送ると、羽優美はほっとして圭子に向き直る。圭子も肩を竦めて、声をひそめて言った。

「食べ終わったら場所移動して話そ」

「うん」

その後は当たり前障りのない話をしながら、羽優美はお弁当を、圭子はランチをそそくさと食べた。

休憩室でコーヒーを買うと、二人で営業課近くの給湯室に行った。来客へのお茶出しも営業アシスタントの仕事だから、給湯室はさしずめ営業アシスタントのテリトリーだ。誰でも使っていることになっているけど、休憩室に社員用の給茶機が設置されていることもあって、他の人はほとんど来ることがない。

一畳ほどの狭い給湯室で、シンクにもたれながら圭子が言った。

「さっき睨みつけてきたあの三人組。多分秘書課の人だよ」

「うん……午前中に秘書課で見かけた。さっき私たちに注意してきた人が、すごい剣幕で私を秘書課から追い出したの」

その時のことを話してしゅんとしていると、圭子は肩を竦めて苦笑した。

「それはやっかみだよ。仁瓶さんの後任に指名されたのが羽優美だったから八つ当たりしてるだけ」

それを聞いて、羽優美はさらにしゅんとする。

「でも、秘書課にいたわけでもない私があの人たちを差し置いて専属秘書になれば、いい気がしないのは当然だと思うけど……」

悩む羽優美に、圭子は手をひらひらさせて励ますように言った。

「羽優美が気にすることはないよ。あの人たちが仁瓶さんの後任に選ばれなかったのは、言ってみれば自業自得なんだから」

「え？ どういうこと？」

訳も分からず訊ねると、圭子は廊下に人の気配がないか気にしながら話を始めた。

「ほら、三上常務ってイケメンで独身じゃない？ 社長の息子さんだし、親会社の創業者一族でもあるし」

羽優美たちが勤めている、株式会社三上^{みかみ}は、仁瓶酒造株式会社^{にべしゅうぞう}の子会社だ。酒類をはじめとした輸入食品を取り扱う部門が独立して設立された。三上の家は創業者である仁瓶の親類筋にあたり、仁瓶酒造と三上の経営陣は、三上の家を含めた創業者一族が過半数を占めている。

「しかも三十歳で取締役役に就任なんて、創業者一族の中でもダントツの若手有望株だし

ね。だから三上常務が取締役に就任した四年前、彼の専属秘書の座を巡って、秘書課の中で熾烈な争いがあつたようなもの。お互いの仕事の足を引っ張って業務を滞らせたり、陰湿なイジメをしてやめさせたりね。で、人事の目も節穴じゃないから、そんなのに関わってなかつた人材から一番優秀な人を選んだらしいのよ。で、それがさつき怒鳴りつけてきた秘書課の人。あの人ってば専属秘書になつた途端、三上常務の女房気取りでね。服装や食事の世話を焼きたがつたり、プライベートの予定も知りたがつたり。取引先との接待の最中にも、常務とはプライベートでもお付き合いがあります。って言わんばかりに馴れ馴れしい態度を取って、常務はずいぶんばつが悪い思いをさせられたらしいわよ」

あつげにとられて聞いていた羽優美は、圭子の話が途切れたところでふうつと息を吐く。

「よくそれだけの情報を集めたね」

常務の人氣ぶりにもびつくりしたが、圭子のその手の情報収集能力にも驚かされる。感心する羽優美に、圭子は苦笑した。

「うん、まあ褒められたことじゃないけど、あたしもゴシップ好きだからね——でね、常務もその人に一応注意しようだけど、服とか食事とかの件はともかく、態度のほうはね……『女房気取りはやめてください』って言えば侮辱にもなりかねないし、注意す

るにも苦労してみたみたいよ。それで通常業務とか取引に支障が出たわけじゃないから余計にね。そんな時に仁瓶綾奈さんがウチの会社に来るって話が持ち上がったの。で、『仁瓶さんを専属秘書にするから君は秘書課に戻って』ってことで決着をつけたらしいわ。相手は常務の従妹で、しかも親会社の社長令嬢でしょ？ だから、その人も文句を言えずに秘書課に戻つたらしいわ」

圭子はざまあみろと言わんばかりに笑い飛ばす。

そんな圭子に、ちよつと困つた笑みを向けながら羽優美は言った。

「でも、何で仁瓶さんの後任が私なんだろ？ 私なんて優秀でもなんでもない、ただの一社員に過ぎないのに」

短大を卒業してから新卒でこの会社に入社し、研修が終わつた後に営業課に配属された。この四年間、営業アシスタントの仕事しかしてこなかったのだから、秘書としての経験なんてあるわけがない。真面目だけが取り柄で、圭子ほど仕事をてきぱきこなせるわけでもない。例えば、営業アシスタントの誰でもいいから一人寄越すようにと言われた営業課長が、有能な圭子を手放したくなくて羽優美を出したというなら話は分かるけど。

悩む羽優美に、圭子はあっさりと言う。

「羽優美だけ先週、三上常務が来た時に騒がなかったからじゃない？」

そう、先週末に突然彼が営業課のあるフロアにやってきて、社員一同——特に女性社員が騒然となったのだ。羽優美は仕事で手が離せず見られなかったのだが、それを圭子に言ったら「なんでもったいない！」とすごく残念がられてしまった。

「常務の顔を間近で見られるチャンスだったのに、羽優美ってば仕事を優先させるんだもん」

「だって、急ぎの仕事を引き受けてたから……」

すぐ側で仕事を頼んできた人が待ってるというのに、手を止めてひと様の顔を觀賞しに行くのは気が引ける。

もじもじと俯く羽優美に、圭子は呆れたようなため息をついてから、にっと笑った。

「でもま、自分を見てキヤアキヤア騒がない女性社員って、常務にとっては貴重なんじゃない？」

「私、秘書の経験なんて全然ないのに……」

「それはやっぱり羽優美が秘書に向いてると思っただけでしょ。仕事は丁寧だし、機密を扱う秘書業務に就いても絶対会社を裏切らないだろうし」

「そ、そういうことなのかな……」

羽優美はちよつと照れて、紙コップを揺らし底に残ったコーヒーを回す。

多忙な重役に、一般社員一人ひとりを細かく見ている暇があるとは思えないけれど、

羽優美の仕事ぶりを認めて指名してくれたのだとしたら嬉しい。

口元が緩んでくるのを抑えられずにいると、圭子がにやにや笑いながら言った。

「やっぱり常務にホレちゃった？」

「だからそういうんじゃないってば。そりゃあかっこいいとは思うけど、付き合いたいとか、ましてや結婚したいなんて全然！」

羽優美は頬を赤らめ、むきになって否定する。

一方圭子にはにやにやしつつ、とぼけたように言った。

「あたし、そこまで言っただけでな」

「圭子っっ！」

その時、廊下のほうから咳払いする音が聞こえてきて、羽優美と圭子は慌てて口をくぐんで肩を竦めた。それから小さく笑みを交わし合う。

圭子がスマートフォンで時刻を確かめると、休憩もあと十分で終わるところだった。

「圭子の紙コップちょうだい。休憩室の側を通るから、リサイクルのごみ箱に捨ててくよ」

「ありがと。——でさ、羽優美。マジな話、秘書課の人たちには気を付けなよ？ やっかみすぎて何かしてこないとも限らないから」

「うん、分かった。ありがと」

「休憩時間が同じ時は、また昼一緒に食べようね」
 圭子は社交的で、一緒に昼ご飯を食べる相手は羽優美の他にもいるのに、心細い思いをしている羽優美を氣遣ってそう言ってくれる。

「ありがとう」

圭子の優しさを嬉しく思いながら、手を振り合って別れた。

その日の午後、三上は会議のためにしばらく席を外していた。

帰ってきた時、羽優美は席を立てて遠慮がちに挨拶をした。

「お、お帰りなさい……」

何か考え事をしていたらしい三上は、ぎょっとして羽優美に目を向ける。

「……ああ、君か」

三上の驚きぶりを見て、いけないことをしてしまったのだと思い、羽優美は慌てて謝った。

「す、すみません。営業課では、帰ってきた人たちに『お帰りなさい』と挨拶することになってたんです。常務が目の前を通られるのに挨拶もしないのでは失礼かと思ったんですが……しないほうがよければそうします」

挫けそうになって俯くと、三上はうろたえたように言った。

「いや、ずいぶん久しぶりに言われたせいでちょっと驚いただけだから……これからはそうしてくれ」

なんだか照れくさそうにそっぽを向いた三上を見て、羽優美も妙に気恥ずかしくなり頬を赤らめる。

「あ、あの。お留守の間にお電話が二件ありました。こちらのメモにまとめてあります。それと、仁瓶さんの私物と思われるものをまとめておいたのですが……」

「ああ、もらっていいこう」

羽優美から伝言メモと仁瓶の私物を受け取った三上は、何故だか落ちつかない様子でオフィスに入っていた。

* * *

秘書になって最初の週は、電話応対の合間にひたすら資料を整理した。

三上のオフィスのキャビネットはどれも、ファイリングされた古い資料の上に新しい資料が雑多に積まれて、溢れんばかりになっていた。整理されていない資料の日付は、仁瓶綾奈が専属秘書をしていた期間と重なる。

何だか、仁瓶さんが仕事してなかったみたい……

しかも、一向に引き継ぎがない。急な退職であっても、引き継ぎくらいはしていったよさそうなものなのに。それもできないほどの何かがあったのだろうか？

そんな風に疑問はあるけれど、詮索は秘書の仕事ではない。上司の周辺の事情にはあまり踏み込みすぎないように、と秘書検定の参考書にも書いてあった。

秘書の仕事について何も知らない羽優美は、秘書になったその日の帰り道、駅前の書店に立ち寄って秘書検定の参考書を買った。秘書について勉強しておけば、少しは仕事の役に立つのではないかと思っただからだ。

内容は秘書業務というより、ビジネススマナーに関することが主だったけれど、言葉遣いとか、社会人になって五年目だということに知らなかったことも多くて、とても勉強になってる。

金曜日には、資料の整理はあらかた終わっていた。初めて見る資料も多かったけれど、分かりやすく分類されていた古いファイルがお手本になった。……それらのファイルは、あの秘書課の人が作った可能性が大いにある。大量の資料の扱いに慣れない羽優美にも分かりやすく系統立てて分類してあるところからして、彼女はかなり優秀な人のだろう。三上が迷惑を被^{こうむ}つても左遷^{させん}したりせず秘書課に戻したのは、会社としても優秀な人材を手放したくなかったからかもしれない。

その日の午後、頼まれたファイルをオフィスに運んだ羽優美は、三上にこう告げた。

「そのファイルは、一昨年の資料が不足しているのですけど……」

早速ファイルを開いて確認していた三上は、眉をひそめて顔を上げる。

「他の資料に紛れているとか、誤って処分してしまった可能性は？」

ミスを疑われたことに傷つきながらも、羽優美は説明をした。

「私も他のところに紛れていないか何度も確認しているのですが、どうしても見つからなかったんです。それとご指示があったように、お預かりした資料はまだ一枚も処分してないです。……もっと早くに報告しなくて申し訳ありません」

見つからない資料は他にもある。一つのキャビネットを整理するごとに、分類を始める時と分類し終えた時とで数や内容をチェックしているし、他のキャビネットに紛れ込んでいた資料も見つけて、正しいファイルへと戻す作業も終わっている。それでも見つからないので、もう一度全てチェックしてから三上に報告するつもりだった。

だが、羽優美がそうやってファイリング作業に手間取っている間にも三上は仕事をしなくて、資料がいつ必要になるかも分からないことを失念していた。

報告が遅れたことを反省し、羽優美は深く頭を下げる。そこに三上のすまなそうな声が聞こえた。

「いや、ちょっと事実確認をしたかっただけなんだ。——するとその資料は僕のデスク

にあるか……」

引き出しを開けてしばし中を探っていた三上は、すぐに諦めて顔を上げた。

「秘書課にも同じ資料があるはずだ。借りてきてもらえないか？」

羽優美は一瞬躊躇したけれど、これも大事な仕事だ。

「はい、今すぐ行って参ります」

羽優美は会釈をして三上のオフィスから退室すると、深いため息をついた。

あの秘書課の人とまた顔を合わせなければならぬかと思うと、羽優美は気が重かった。

まともに相手にしてもらえなかったらどうしよう……

怒鳴られるのは怖いが、資料を借りてくるだけの仕事もできないのかと三上に失望されるのも辛い。

勇気を振り絞って秘書課のドアをノックし、「どうぞ」と返されてからおそるおそるドアを開ける。

今回は、怖れていたように追いつ返されることはなかった。その代わり、あの女性が自分の席に座ったまま、不機嫌さを隠そうともしないで睨んでくる。

「何の用？」

今日はボルドー色のカシユクールを着て、髪をギブソントックにしている。いつもブラウスにカーディガンを羽織り、セミロングの髪を頭の後ろでひとまとめにしているだけの羽優美は、服装からして気後れしてしまう。

だからといって、ここで引き返すわけにはいかない。

逃げちゃダメ、逃げちゃダメ……

羽優美は自分に言い聞かせながら中に入ってドアを閉め、勇気を振り絞って言った。

「あのっ、三上常務に頼まれて、資料を借りに来たんですけど……」

「どの資料？」

羽優美が資料名を告げると、女性は無言で立ち上がり、たくさん並んでいるキャビネットの一つから資料を取り出した。

貸してもらえそうな様子なので、半ばホツとしつつ待っていると、女性はドアの前で待っていた羽優美を押しつけて廊下に出る。

「え？ ……え？」

戸惑いながら、閉まってしまったドアと秘書課に残っている人たちを交互に見る。彼女たちはちらっと羽優美を見たものの、気まずげに目を逸らして何事もなかったかのようには仕事を続ける。そのうち、女性が自ら三上に資料を届けようとしているのではと気付いた羽優美は、秘書課の人たちに会釈をすると、慌てて秘書課を出て女性の後を追った。

急いでいるからといって会社の中で走るわけにもいかず、早歩きで懸命に戻る。が、羽優美が秘書室に辿り着いた時には、ファイルを持った彼女は三上のオフィスの中に消えていた。

オフィスの側に寄ると、ドアの向こうから女性の声が聞こえてくる。

「秘書としての経験もない、ましてや秘書課に配属されたこともない彼女を信用できるわけがありません」

その反論の余地もない批判に、ドアノブを回そうとしていた羽優美の手は凍りついた。あの女性が、三上に訴えているようだ。

秘書課の女性の容赦ない指摘はなおも続く。

「信用とは、実績と人間関係を以て培われていくものではありませんか？ 彼女には何の実績もなく、さらには秘書課に所属することもなく三上常務の専属秘書になりました。これではわたくしたちと信頼関係を築けるわけありません。ですから、彼女にこの機密資料を預けることはできず、わたくし自らお持ちしたんです」

羽優美は唇を噛みしめながら話に聞き入った。

彼女の言う通りだ。羽優美も彼女の立場だったら、羽優美のような相手に大事な資料を貸すのは躊躇っただろう。

三上も羽優美には電話の応対と資料管理しかさせない。それは、羽優美を信用していないからではないだろうか。

落ち込んだところに、追い打ちをかけるように女性の声が聞こえた。

「僭越ながら彼女を一度秘書課にお預けいただけませんか。秘書課でしっかり教育して、一人前になったらお戻しいたしますわ」

自信に溢れたその声に、羽優美は力なく項垂れる。そうしてもらったほうがいいのかも知れない。彼女の下で働くのは怖いけど、こんなふうには三上に迷惑をかけてしまいうらいなら。

「もしよろしければ、彼女を教育する間、わたくしが代理をいたしますわ。前回のような失態は二度といたしません。ですから今一度チャンスを」

ずっと黙っていた三上が、彼女の言葉を遮るように口を開いた。

「君は、この僕のこと信用できないと言っているのか？」

「え——？」

呆然としたような彼女の表情が聞こえてくる。羽優美も、三上が何を言っているのか分からず、戸惑いつつもドアノブからそっと手を離れた。

三上の厳しい声が響き始める。

「僕が高梨さんに資料を借りてくるよう頼んだのは、彼女を信頼してのことだ。僕だっ

て、その資料が機密情報で、関係者以外の目に触れてはならないものだというのはよく分かっていて。しかし、これまでの高梨さんの仕事ぶりを見て、彼女だったらそんな機密情報の取り扱いも任せられると思った。君は、その僕の判断を間違っているとも言うたいのか？」

「い、いえ……そんなつもりは……」

さつきまで自信に溢れていた彼女の声が、今はかわいそうなくらい弱々しい。三上はさらに続けた。

「君の実務能力の高さは評価している。だが、同じ会社の仲間を信頼し、協力し合うことで、その能力も生かされると覚えておいてもらいたい」

「……申し訳ありませんでした。お言葉、肝に銘じます」

「分かってくれたなら行っている」

「――失礼いたしました」

羽優美が慌てて一歩下がるのと同時に、ドアが開いて女性が出てくる。彼女は羽優美に気付くと、一瞬憎々しげに睨んでから三上のほうに向き直り、優雅な一礼をして扉を閉めた。

そして振り返り、後退った羽優美につかつかと近寄ってくる。

「常務に庇ってもらったからって、いい気にならないことね。この無能が」

侮辱の言葉が羽優美の心を抉る。だが羽優美には、その言葉を否定することができない。羽優美の傷ついた表情を見て少しは溜飲を下げたのか、見下した笑みを浮かべて女性は続けた。

「常務の専属秘書になったからっていい気にならないで。秘書課に在籍したこともない、資格も知識も持たないあなたが、専属秘書として務まるわけがないんだから。そのうち常務もあなたが使えないって気付いて、仁瓶さんの時と同じように持て余すことになるわ」

女性が勝ち誇ったように言い終えた直後、こんこんとドアが叩かれる音がした。はつとして振り返った女性の向こうに、三上の姿が見える。いつの間にかドアが開いていて、彼はそこにもたれかかって腕を組んでいた。

「そうやって他の社員を脅しつけることもやめてもらいたい。態度が改善しないようなら、降格も有り得るのでそのつもりで」

女性はわなわなと震えると、「失礼します」と小さく言って、足早に出て行った。

その後ろ姿を目で追いながら、羽優美は別のことを考える。

常務は、私のことを信頼してるの……？

にわかには信じがたい。でも、本当だったら嬉しくてたまらない。

羽優美はにやけそうになる顔を引き締めて、そろそろと三上に目を向ける。三上はそ

の視線に気付いて、気まずげに微笑んだ。

「嫌な思いをさせて、悪かったね」

謝ってもらうことなど何も無い。羽優美は慌てて首を横に振る。

「いいえ……こちらこそお役に立てなくて申し訳ありません」

資料を借りに行く役目は果たせたと言えば果たせなければ、三上に余計な手間を取らせてしまった。

頭を下げた羽優美に、三上は申し訳なさそうに続ける。

「君は悪くないよ。……問題は、僕の指導力不足だね。さっきの女性は優秀な秘書なんだが、専属秘書に昇格させたら、その……いろいろ問題があつて。指導はしたけど改善が見られなくてね。重大な過失があつたわけじゃないから扱いに困って、それで仕方なく仁瓶さんを僕の秘書にするからと理由を付けて、彼女を秘書課に戻したんだ」

確かに、『女房面にようぢうづらするから異動させる』なんて理由を挙げたら、何を根拠にそう言うのかという話になるだろう。下手をすれば不当待遇だと訴えられかねない。あの女性なら、理詰めでそういう話に持っていくそうだ。雇われる側には雇われる側の苦勞があるけれど、雇う側にも苦勞があるんだなとつくづく思う。

何だか彼が疲れた様子だったので、羽優美は彼を励ますつもりで話しかけた。

「ちょっとだけ噂うわさを聞いてます。常務が取締役に就任した時、常務の専属秘書の座を巡っ

て熾烈しれつな争いがあつたつて」

でも、狙うのはあの人たちの勝手で、常務は何も悪くないです」と続けたかったのに、彼は弱り顔をして後ろ頭を掻いた。

「そんな噂うわさが流れてるのか……まいったな」

羽優美は自分が余計なことを言ったのに気付いて、慌てて謝った。

「す、すみません！」

「いや……まあ知ってるなら話してもいいか。——問題なのは彼女だけじゃなくて、この件に関しては秘書課の社員は誰も信用できなくてね。それで秘書課以外の部署から専属秘書を採用させてもらったんだ」

「そうだったんですね……」

圭子の想像は当たりだったというわけだ。足の引つ張り合いやイジメに関わっていなかったはずのあの女性も、専属秘書になった途端、三上のことを狙い出したのだから、秘書課の人間を信用できなくなるのは仕方がないと思う。

しみじみ考えにふけていた羽優美は、はっと気付いた。三上がこんな話をするのは、羽優美にもあらかじめ釘を刺しておきたいからではないかと。

次の瞬間、羽優美は口走っていた。

「あのっ！ 私は常務のことを狙ったりしませんから！ ……あ」

口にしてしまったから馬鹿なことを言ったと気付き、しどろもどろに謝罪する。
 「へ、変なこと言ってますみません。あの……常務のお仕事を邪魔するようなことは絶対
 しないと聞いたかったです。それはお約束します」

一瞬、目を見開いた三上は、片手で後ろ頭を搔いてからオフィスの中に引き返した。
 そして羽優美を中に招く。

「……高梨さんが見つけれなかった資料、僕も処分した覚えはないから、ここの引き
 出しにあるはずなんだ」

そう言いながら、三上はデスクの引き出しから資料の束を取り出し、どかっどかっ
 デスクの上に置いていく。

まだこんなにも未整理の資料があったなんて……！

嘩然^{あざ}としていると、三上が気まずげな顔をして羽優美に微笑んだ。

「もう気付いてると思うけど、仁瓶さんはあまり仕事ができなくてね。僕も忙しさに
 かけて仕事を教えてあげられなくて、そうこうしてるうちに收拾がつかなくなっ
 しまったんだ」

話をしながら、彼はどんな書類を積み上げていく。

羽優美が口を開けて見つめているうちに、三上の広いデスクの半分が未整理の書類で
 埋め尽くされた。

「処分していい書類も交じってるから整理が大変だと思うけど、頼んでもいいか
 な……？」

きちんとしているように見えた常務に、デスクの引き出しに物を溜め込む癖があった
 なんて……

ばつの悪そうな様子から、彼も自分のそういうところはマズいと思ってるらしい。

三上の意外な一面を見られて、可笑^{おか}しさで口元が緩みそうになる。それをこらえて、
 羽優美は「お任せください」と力強く答えた。

* * *

翌週は月曜日が祝日だったので、会社は火曜日から始まった。その日の昼休憩、羽優
 美は社員食堂の片隅で一人お弁当を食べる。

この週は、圭子と休憩時間が重ならなかったからだ。営業アシスタントはお昼時も仕
 事を頼まれてもいいように、一人は課内に待機しなければならぬ。そのため、休憩は
 交代で取ることになっていて、今週の圭子の休憩は一時からだった。秘書になってから
 の羽優美の休憩時間は、毎日十二時から一時に固定されている。

この後、どうしようかな……

圭子がいればおしゃべりして過ごすのだが、一人でいると時間を持て余す。食堂は混み合っているのです、いつまでもいるのは気がひける。それに、いつまた秘書課の人たちと会ってしまうかと落ち着いていられないのだ。

先週も四回、ここで彼女たちと行き合った。社員食堂とは思えないくらい内装もメニユーもおしゃれなので、女性社員に人気なのだ。初日以降は叱られることはなかったけれど、視線が合うとすごい目つきで睨にらまれた。だがそれで済んだのは、圭子が一緒だったからかもしれない。先週末のこともあるし、一人でいる今日は何か言われるかもしれない。

そう思っているうちに、秘書課の人たちが食堂に入ってきた。さいわい、羽優美に気付いていないようなので、お弁当を手早く食べて席を立つ。

このまま秘書室に戻ったほうがよさそうだ。早く戻って先週買った参考書を読み返していれば、時間の有効活用にもなる。

使ったコップを返却口に置き、こそこそと食堂を出る。

歩き出してすぐ、羽優美は廊下の端に立って自分を見つめてくる人物に気付いて、ぎくつと足を止めた。

坂本和志さかもとかずし——秘書課の人以外で、羽優美が一番会いたくなかった人。

立ち読みサンプル はここまで

エゴイストは秘書に恋をする。

坂本は、今年四月に中途採用で営業課に入ってきた男性だ。かっこよくて話し上手で、営業課だけでなく、他の課の女性社員の間でもあつという間に注目的になった。でもすぐに、社長令嬢である仁瓶綾奈との仲が噂うわさされるようになった。あの時は、「残念」とか「さすが」といった声があちこちから聞かれたものだ。

けど坂本本人は、そんな噂が流れて困っているのだと羽優美にこっそり告げてきた。
——向こうから告白してきたんだけど、オレには全然その気がないんだ。でも相手は創業者一族だから、機嫌を損ねたらクビになりかねないだろ？

そんなことでクビにはならないだろうけど、職場に居づらくはなるかもしれない。そうなるのは避けたいという彼の気持ちは分かる。だから羽優美は、彼から相談に乗ってほしいと言われた時、メールアドレスと電話番号を交換して会社の外で何度か会った。グチを聞いてあげるだけのつもりだったのだ。

けれど坂本は、何かにつけて手をつないできたり肩に腕を回したりしてくる。最初のうちははぐれるといけないとか、人が多いから側に寄ったほうがいいという言葉を通じて我慢していたけれど、ある時それらが羽優美に触れるための単なる口実だと確信して、思い切って言った。

——困ります。

——そんなこと言わないで。もう気付いてるだろ？ オレが本当好きなのは君な